

◆岡山大学法学部だより◆

※ 本メールは法学部の教職員、在学生、卒業生および岡山大学法学部ホームページから登録された方にお送りしています

第 145 号(2018 年 7 月 2 日発行)

発行：岡山大学法学部 学部長室

=====
今日は梅雨の中休み。よく晴れて日差しが強く、もう夏の気配です。

○産休・育休を経て思ったこと

学生の皆さん、こんにちは。法社会学を担当している平田です。

今回は、私の出産・育児を通じて思ったこと・感じたことを簡単に書いてみようと思います。

私は昨年 1 1 月に出産しました。産前産後休暇・育児休暇を取得し、この 2 学期から復帰しています。聞くところによると、どうやら法学部では初の産休・育休取得者であるとのこと。まだ育児経験 6 ヶ月の新米の親ですが、今までで思ったこと、これから社会に出て行く皆さんに伝えたいことを以下に書いてみます。

(1) 育児は楽しい！

まずもってお伝えしたいことは、育児は楽しい、ということです。昨今、子育てにかかわる話題で耳にすることは、待機児童、ワンオペ等々、ネガティブな語りが多いです。しかし、実際親になってみて実感したことは、自分の赤ちゃんを育てるということは、とても楽しく、喜びと感動に溢れることだということです。一週間前にはできなかったことが、今できるようになっているという感動、目の前のものを凝視している一生懸命な様子、体を反らせて真っ赤な顔で泣く必死さ、まぶしい笑顔、どれをとっても生命力に溢れ、幸せを感じさせくれ、また意外性も提供してくれる――育児はとても楽しいものです。出産する前までは、すでに親になっている友人・知人から、「子育て楽しんでね」と言われる度、あんな大変そうなことをどうやって楽しむのか？と聞いていましたが、実際始めてみると、確かに楽しいです(笑)。もちろん、大変なことも数えきれないくらいありますが(例えば睡眠不足)、それを上回るほどの幸福感を提供してくれます。

そして、子供がいると、それだけで今まで繋がらなかった方々とつながることができるのも、楽しいものです。例えば、赤ちゃん連れで街を歩いていると、頻繁に声をかけられるようになりました(年配女性が多い傾向ですが、性別年齢あまり関係ありません)。他愛もない立ち話ではありますが、そんなおしゃべりは楽しいですよ。また、保育園関係でも、新たな人間関係が広がりました。

冒頭でも書いたようにまだ子供は 6 ヶ月であり、実は今が一番楽しい時期なのかもしれません。成長するにつれ、可愛さだけで収まる時期は過ぎ、真剣勝負をしなければならない時もあるのだと思います。とはいえ、その時期その時期の可愛さや素敵なお面はあるでしょう。成長する様子を見るのは嬉しい反面、今までの可愛さが失われるという寂しさも同時に感じるものです。このような切なさを感じてしまうほど、やはり育児は楽しいのです。

(2) 当事者にならないとわからないことと想像力の大切さ

もう一つ、妊娠・出産を経て感じたことは、当事者にならないと分からないことはたくさんある、ということです。これは上記で書いた楽しさといった点のみならず、当事者が感じるプレッシャー、辛さ、不安、不便さという面においてもそうです。例えば、つわり中はどれほどしんどいか、ベビーカーでの移動はエレベーターがないといかに大変か(どこにエレベーターがあってどこが階段だけか、意識したことはありますか?)。お店に入って赤ちゃんが泣き出したらどうしようという不安感をどれほど感じるようになるか(結局私はほとんど外食をしな

くなりました)、モタモタしている時に受ける冷たい視線にいかにか傷つくかなど、これもまた枚挙にいとまがありません。子供を産み育てることは、親(特に母親)が個人的責任をもって、他の人に迷惑をかけないように行うべきである、という暗黙のプレッシャーを、現代の日本社会では強く感じてしまうのです(本来、子育ては自分たちだけではなく周りや社会全体からの協力を得つつ進めることですよね)。

妊娠出産や育児についてほしい感じなのかと想像はしていましたが、やはり実際に当事者になってみないと辛さや不安感は分かりません。そして、これは子育て当事者に限定されず、広く社会的弱者・マイノリティー全般に言えることだと私は感じました。障害者、LGBTQ、高齢者、経済的困窮者はもちろん、がん等の患者、不妊に悩む人、(セクハラを含む)犯罪被害者等々、当事者の抱く辛さや不安感は、当事者ではない自分が考えるよりもはるかに大きいでしょう。これは身体能力・所得・発言力等の低さなどからくる実質的な辛さのみならず、何かを「普通に」できなかった場合に周りから非難を受けるのではないかという、捉えどころのない、しかし強いプレッシャーも含まれます。この非難は、「甘えだ」とか「自分の責任だ」とかの論理で弱者をますます弱者にさせることとなります。本当は他者は理解してくれるのかもしれませんが、非難を受け自分がさらに辛い思いをするのがこわいという気持ちが生じるため、辛い現状を発信できず、結果現状が改善されないままになりがちです。

当事者の抱える辛さや不安感を少しでも想像するよう試みること——これは皆が暮らしやすい社会を構築していく上で必要不可欠でしょう。そして社会的弱者・マイノリティーが不安感・不便さ・辛さについて発信し、声を上げることは、勇気ある行動であることをきちんと自覚したいものです。仮に今は社会的強者の人も、いつ自分が社会的に弱い立場になるのかわかりません。辛い思いをしている人々に寄り添い、目を向ける社会でありたいと思うし、そのようになるためにも、相手の状況に思いを巡らす想像力を忘れないこと、そして政治、行政、企業等の制度設計・意思決定のポストには多様なバックグラウンドを持つ人々がついてしかるべきだと強く思うのです。

皆さんが主体的に自らの社会生活を送っていかれることを願っています(子供を持つか持たないかはプライベートな、個人個人の判断です)。

法学部准教授 平田 彩子

.....

- ・本メルマガは、毎月1回程度配信しています。
- ・法学部の詳細情報に関しては、HPも併せてご覧ください。
法学部 HP <http://www.okayama-u.ac.jp/user/law/index.html>
- ・本メルマガには返信なさらないようにお願いします。
- ・本メルマガの登録・解除は、以下のURLにてお願いします。
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/law/local/mail/index.html>
- ・ご意見・ご感想は、法学部 情報委員会 joho-mailmaga@law.okayama-u.ac.jp まで。